

わたしが選んだ この一冊

河合文化教育研究所からの推薦図書

河合塾

2021 わたしが選んだこの一冊

河合文化教育研究所からの推薦図書

発行年月 2021年6月

発行 河合塾進学事業本部

〒464-8610 愛知県名古屋市千種区今池2-1-10 千種校南館4階

TEL052-735-1664

FAX052-735-1439

編集 河合文化教育研究所

本部事務局 〒464-8610 名古屋市千種区今池2-1-10 Gビル3F

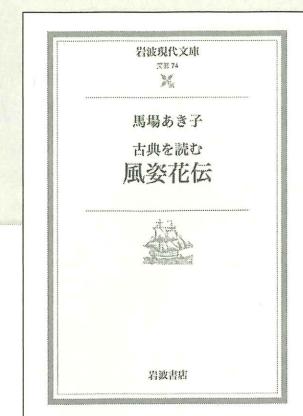
文教研・東京 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-25-2 千駄ヶ谷オフィス1F

文教研・京都 〒604-8131 京都市中京区三条通東洞院東入ル菱屋町41-2 (河合塾京都校内)

文教研・九州 〒810-8619 福岡市中央区渡辺通4-2-11 (河合塾福岡校内)

お問い合わせ先 河合文化教育研究所本部事務局 TEL052-735-1706 FAX052-735-4032

2021



古典を読む 風姿花伝

ばば
馬場あき子 著

岩波現代文庫 [定価:本体900円+税]

推薦 小野木豊昭 (おのぎ・とよあき)

1990年、伝統芸能企画制作オフィス〈古典空間〉を設立。伝統芸能を専門に公共ホール自主事業公演の企画立案、学校公演や海外公演コーディネート、各種イベントの企画・制作、プロデュースを行う。メディア出演や大学講師、各種邦楽コンクール審査委員を務めるなど若い世代への普及、さらに伝統文化による地域振興の支援などにも携わる。船橋市文化芸術振興基本方針策定委員会委員、富山県・公共ホールネットワーク事業アドバイザー、東京都オリンピック文化プログラム検討部会専門委員などを歴任。現在、(公社)全国公立文化施設協会コーディネーターほか。一方1999年より河合塾国語科(古文・漢文)講師を務める。

「秘すれば花なり」。この不思議な響きを持つ世阿弥の言葉に対して、馬場あき子は「それにしても、〈花〉とは一体何なんだろう。」と問いかけ、「人生の一人の旅人であるわれわれにとっても、じつに大きな指標をなしている探求である。」と今を生きる私たちとの接点を示してくれる。中でも『風姿花伝』「年来稽古条々」にある、芸の習得に向けた稽古のプロセスと年齢と共に抱くべき心得は、単なる能楽論、芸術論の範疇を超えて教育論、人生論として強く響く。

「十二三より」では、「先、童形なれば何としたるも幽玄なり。～此花は、まことの花にはあらず、ただ時の花なり。～易き所を花に當てゝ、技をば大事にすべし。」とある。十二三歳の少年は、欠点は目立たず美点のみに注目が集まるが、それは「まことの花」ではなく少年の魅力という時期的な花にすぎない。ゆえにこの時期の稽古は技術の基礎、いわゆる楷書の演技を身に付けることが大切と説く。また「十七八より」では、「この比は、又、あまりに大事にて、稽古多からず。先声変わりぬれば、第一の花、失せたり。～此比の稽古には、たゞ、指をして人に笑わるゝとも、それをばかえりみず、～心中には、願力を起して、一期の堺こゝなりと、生涯をかけて、能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。」とある。最も感じ易い青年期のはじめ、第一の花も消え失せた精神的な衝撃の大きさにいたわりの目を向けると共に激しい決意をも促していると、馬場は世阿弥の言葉を今に「翻訳」する。幼少年期から青年期、壮年期、そして老年期に至るまで、一人の役者が世代ごとに直面する心身の課題をいかに乗り越えて「まことの花」に近づくか、600年を経た現在、一人の人間がたどる人生と重ね合わせてみてもまったく色褪せることはなく届いてくる。

価値観の転換を強いられた第二次世界大戦直後に多感な青春の只中にいた馬場あき子は、出会った短歌と

能楽と向き合うことが自己形成の大きな糧であった。「どんな自分になりたいのか」、その答は容易には見つからない。「秘すれば花なり」という言葉に感應し、世阿弥が追い求めた「花」の意味を自身の人生と丁寧に重ねたゆえに、この『古典を読む 風姿花伝』で紡がれた言葉の数々は、世阿弥の思想と一体化して更なる力を得たのだと思う。

私は学生時代に歌舞伎に出会い以来その魅力の虜となり、その後、邦楽、舞踊、話芸など伝統芸能の普及振興を目指すプロデューサーとしての道を歩むことになった。「伝統文化が生活の延長線上に“当たり前に”ある社会をつくる」……目指す着地点である。面白くて楽しくてカッコいいを追求した学校公演、伝統芸能と共に図る地域振興など、伝統と現代との接点づくりの実験と実践を全国各地で展開している。

伝統芸能は、〈先人から受け継ぎ未来へ伝える価値〉を有し、過去に生まれるも〈時代を超えた共感〉を得られ、〈日本の風土へのアイデンティティ〉を体感できる存在だと心底思う。だからこそ一人でも多くの人々と共有したい。同時代性を再発見できる世阿弥もまた然りである。

しかし、伝統の本質を見失わずに間口を広げる作業は容易ではなく、未だに答は見出せていない。なぜなら、人から人へ継続的に伝えられ、時間をかけて熟成してきた伝統文化を繋ぎたいのは、スピード感、利便性、変化などの価値観が支える現代社会だからだ。さらに新型コロナウイルスは私たちに文化活動の停止を迫っている。だがその間に「身体の栄養源は食物であり、精神の栄養源こそ文化活動である」という真実を再認識できた。そんな今だからこそ、世代を超えて共に答を探して行きたい。世阿弥の言葉には「伝統文化が土台にある社会」をつくるヒントがあると思えてならない。